2024－7－14

08【街の散策からの気づき発見】
　めがね橋

会員　K.T.

　散策道の大落古利根川の遊歩道で、4号線の埼葛橋を超え、旧倉松落に沿って、倉松公園を抜けていくと、八丁目先あたりに市道橋になっている通称「めがね橋」がある。水は、どぶ川のように濁っている。側に看板があり、こう記している。
「埼玉県指定有形文化財（建造物）
　めがね橋（旧倉松落大口逆除）　付倉松落大口逆除碑
　　平成三十一年二月二十二日指定
　めがね橋は、明治二十四年(1891)六月に完成した樋門で煉瓦造りの樋門では県内で二番目に古いものです。（中略）現在では樋門としての機能はなく、旧倉松落にかかる道路橋として利用され、「めがね橋」という通称でしたしまれています。（中略）　倉松落は、上流の杉戸地域から大落古利根川へ排水するために江戸時代に整備された排水路ですが、大落古利根川が増水すると、倉松落へたびたび逆流が発生していました。逆流防止のため、万延元年(1860)に木製の樋門が設けられましたが、明治二十三年(1890)の水害で大破したため、頑丈な煉瓦造りの樋門として、この倉橋落大口逆徐（現在のめがね橋）が造られました。（後略）」

　歴史年表で調べると、倉松落の排水路に木製の樋門が設けられた1860年は、桜田門外の変、江戸幕府の大老・井伊直弼が江戸城外の桜田門で殺害された事件があった。また、煉瓦造りの樋門になった1891年頃の明治時代は、西洋の近代建設様式が積極的にとりいれられ、建設材料が木材から煉瓦になっていく時代になる。1888年(明治 21)に東京銀座の街並みが煉瓦街になっている。火事に強く、くさらない煉瓦は明治時代45年間の象徴的な建材といえる。「めがね橋」は、その時代の煉瓦造りの樋門である。しかし、これを見ようと、注意しなければ見過ごしてしまうだろう、と思う。そんな「めがね橋」だが、土木関係者には有名で、土木遺産として埼玉県指定有形文化財（建造物）となっており、土木学会からは「選奨土木遺産」にされている。その選奨理由として、「埼玉県に数多い煉瓦造り樋管・堰の中で最古級のものであり、現存する中で最大級で、かつ4連は、これだけである。」、と評価は高い。建築名称は、「倉松落大口逆除」とされているが、頂部がアーチ型の4連で水面に円形が並んで眼鏡のように見えることから、「めがね橋」の名称がある、とのことだ。
　余談ながら、レンガの歴史は古い、紀元前4000年から1000年頃、四大文明の一つのメソポタニア文明で、始めは土を固め太陽の熱で乾燥させただけの日干しレンガが使われた。紀元前3000年頃には焼成（しょうせい）煉瓦が使用され始めたらしい。他のエジプト・インダス・黄河の文明圏も同じような煉瓦の歴史が同時発生的に独自で始まっていた、という。建材として便利だったのだろう。日本に本格的に建築材料として煉瓦が導入されたのは、幕末期から明治時代になる。外国人技師の指導のもと、日本の瓦師が苦心して焼き上げた。土を固めて干し、焼いた煉瓦を焼成という。焼いた煉瓦は雨に強く、くさらない。焼き上げる時に空気中の酸素と土の鉄分が結びつくと、酸化鉄になる、これが赤い色の正体、赤煉瓦の色の素は砂鉄の赤さびと同じものだ。煉瓦を建材として、日本に大きな影響を与えたのは、オランダとイギリス、両国は煉瓦の赤を建物の外観にしている。日本は、両国の影響を受け、赤煉瓦がむきだしでなければ煉瓦建築ではない、と思いがちだが、石材が豊富な地中海岸のイタリアやフランスは、煉瓦造建築の外観に石材を使っている。
　さて、「めがね橋」の話に戻る。樋門の役割は終えたとはいえ、今も市道橋としては現役である。この煉瓦造りの構築物は築133年の歴史を経ている。一般に道路橋の設計寿命は約50年、コンクリートの橋梁は約60年といわれる。『百年以上も、現役を続けている「めがね橋」さん、あんたはすごい。』、と思う。